ZOCALO 2018 2▸3

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

特別寄稿：現代版画センター運動の傍らで ――運動のはるかな精神について　栗原 敦

1月16日（火）〜3月25日（日）
版画の景色

現代版画センターの代表だった綿貫不二夫さんとの出会いは、大学に進学して、郷土の学生寮（上毛学舎）に入ることができた一九六五年に、一学年上の綿貫さんと同室になった時です。すでに半世紀を越えているとは！　全く呆れるほどですが、以来、ほとんど途切れることのない交友のなかでは、毎日新聞社に入社されて販売局配属になってから現代版画センターを立ち上げる前のあたりが、一番間遠だったのかもしれません。

私が最初から現代版画センターの会員になったのはどういう気持ちからだったか、定かに思い出せないくらいですが、友人としての自然な延長だったようです。物珍しくてオークションを見物にも行きましたし、コレクターを結び、広める運動体としての通信や配布物はずうっと読んでいましたが、当時、版画やコレクションに直結する自分自身の関心は薄く、時々遊びに行く、ごく稀にちょっとしたプレゼントのための小品を購入する、そんな形で「傍らで」過ごしていました。金沢大学に勤務していたころも、上京するたびに訪ね、綿貫さんの方でも、金沢に立ち寄った際に隙間を見つけて声をかけてくれたりしました。

帰京後のことですが、個人的に思わぬ出会いを導いて貰ったのは、私の主要な研究対象のひとつ、宮沢賢治について、伝記上の歴史事実を裏付けるために地元紙を始めとする資料調査で岩手県立図書館などへ通っていたのを知った綿貫さんが、盛岡に行くなら、MORIOKA第一画廊の上田浩司さん（全国に先駆けて現代版画センター盛岡支部を作ってくれたという画商さん）を訪ねるといいと紹介してくれたことでした。八四年八月にお会いした上田さんの導きで、まだ美術館設立以前の県立博物館で岩手近代美術史を調査していた佐々木一成さん、やがて同僚の岩手近代史の大島晃一さんの両学芸員との知遇を得ることになって、花巻の独立教会（無教会）クリスチャン斎藤宗次郎の自叙伝他のマイクロフィルム撮影と「実践女子大学文学部紀要」（87・3刊）での紹介につながったのでした（『二荊自叙伝』（下）「解説」参照、岩波書店、2005・6刊）。

しかし、今また、改めて「現代版画センター」の美術運動としての精神はどんなところにあったのだろうかと振り返ったとき、私が調べていた一九二〇年代初めの岩手県内における児童自由画教育の運動とも、決して無縁ではなかったらしい、伏流水とでもいうべき流れに添って、深く繋がっていたというべきだと思い当たって、驚きを禁じ得ないのです。

オノサト・トシノブ《銀河》1981年｜シルクスクリーン
現代版画センター エディション｜有限会社ワタヌキ／ときの忘れもの所蔵

よく知られているように、山本鼎の提唱を受けて、一九一九（大正8）年に長野県小県郡神川村の小学校で第一回児童自由画展覧会が開催され、以後大きな波紋が、長野県下から東京へ、そして広く全国へと展開して行きました。岩手県下での児童自由画に関する活動の記事は、早くも二〇年に盛岡の画家たちの集まり「七光会」とともに登場します（「実践女子大学文学部紀要」第28集、86・3刊）。

宮沢賢治の第一詩集『心象スケッチ　春と修羅』（関根書店、1924・4刊）に収録するために準備されて、結局未収録に終わった草稿「自由画検定委員」は、一九二三年一一月一一日から一五日まで稗貫郡農会が主催した東北六県及び北海道連合家禽共進会を機会に、会場となった花城小学校が主催して開催した県下小学校児童自由画展覧会に因む作品でした。関東大震災後でしたが、国民精神作興・国民精神善導を旨とした自由主義教育への抑圧の影は、まだ岩手県下では表立たずに、充実した児童自由画展覧会が行えたようでした（一九二四年秋になると、仮装を伴う演劇の禁止が通牒され、賢治が花巻農学校で試みていた学校劇が行えなくなっていくのですが）。

群馬県の高崎では、軽井沢の星野温泉にアトリエを構えた山本鼎とその近くに実家の別荘があったことで交流を持った井上房一郎が中心となって、一九二一年二月に山本らを迎えて「自由画教育の展覧会と講演会」を開催します。「募集要項にクロポトキンの教育論が引用されていたことから県学務課の介入があり、全県に呼びかけたものの出展は高崎市内小学校だけとなった」が、「九〇〇〇枚近い出展と、五〇〇〇人近い観衆が集まった」（『井上房一郎・人と功績』みやま文庫203、2011・7刊）といいます。井上はその後山本からパリ留学を勧められ、一九二三年二月に出発、二九年一二月の帰国まで、七年近く滞在しました。帰国後の井上は、実業家の父保三郎が井上工業株式会社に改組していた家業の取締役を務めるとともに、工芸運動を自ら興して支え、敗戦後も音楽運動、美術運動の支援者として多大な功績をあげました。いま私は、農民運動に集中し、病のために、余りに短いままに活動の中断を余儀なくされた宮沢賢治が、財と健康を得て、より広く、長い時間を費やしていたなら、井上が果たした文化的パトロンの役割に重なったかもしれないとすら空想します。

隣り町の渋川、前橋育ちの私には、商都高崎についての実感はないのですが、大学生時代の綿貫さんが、高崎高校時代のマンドリンクラブＯＢとして、毎週のように在学生の指導、支援に通っていたことはよく知っていました。そして、この度、毎日新聞社の下で、上司を代表にくどき、久保貞次郎さんを顧問に、小コレクターの会の尾崎正教さんを事務局長として始める時のことを「現代版画のパトロン久保貞次郎」（『久保貞次郎を語る』文化書房博文社、1997・10刊）で読んで、高校生の頃から「井上さんのもとに出入り」していた綿貫さんが、井上さんの伝手を頼って、助言・協力者を求めていたのを知りました。次いで、協力を仰ぎに行った久保さんから、「新聞社の事業として全国の小・中学校にオリジナルな絵（版画）を寄贈し、美術教育に役立ててもらい」云々という名目などを巡って、「痛烈な一言」を浴びせられたことを知りました。長い間美術教育運動に関わってこられた経験を踏まえての、当然な反応であったかとも思われます。久保さんもまた、戦時中の困難な時代、そして、敗戦後の新しい文化の育成に深々と関わって来た方だったのですから。

要するに、山本―井上、そして久保を繋いで、それらの方々の長年の試みを内在させる精神が現代版画センターの運動に流れていたことを、近代美術史研究の専門の方に検証していただければうれしく思います。

一九八四年のある時期から、現代版画センターの経営に困難が生じたようでした。規模が拡大し、事業経営が次のレベルに上がろうとする際にありがちなことかと想像しますが、それが混乱を生みました。混乱の末に破産手続きに入ることになりましたが、法的処理の結果、債務の半ばが債権者に保証されたという、一般の破産処理の例では考えられない比率だったので、破産する必要が無かったのでは、といった評も耳にしました。純然たる経営処理や、利益を求める経営感覚からいえばそうかもしれませんが、資産としての作品等は、作者とその創作過程を支える者、そして出来たものを享受して支える者たち全ての総合的な価値の現れです。単に商取引上の利益のための商品ではありません。この意味での作品の価値を毀損することの最も少ない整理者の手に委ねる道が求められた結果だったでしょう。そして、現代版画センター運動の精神は、そのような形でかろうじて最後まで貫かれたのだと思います（蛇足ながら、代表は、法的な破産処理が済んだ後も、様々な補いを尽くしたと仄聞いたしました）。

今回の図録には、当時を良く知る方々に依頼したアンケートの回答を掲載します（許可いただいた方のみ）。回答者の一人である栗原敦氏より、大変示唆に富む文章を寄せていただきましたので、同氏の許可を得て、全文を掲載しました。裏面に図版を掲載しました、出品作家の柳澤紀子氏、堀浩哉氏も、アンケートに回答くださいました。（R.G. / G.U.）

開館35周年記念 美術館につとめてみたら？……　⑤

ソカロイド：
ニホンジカンニセンジュウナナネンジュウイチガツミッカキンヨウビサイタマシウラワクトキワキュウノサンジュウノイチサイタマケンリツキンダイビジュツカ

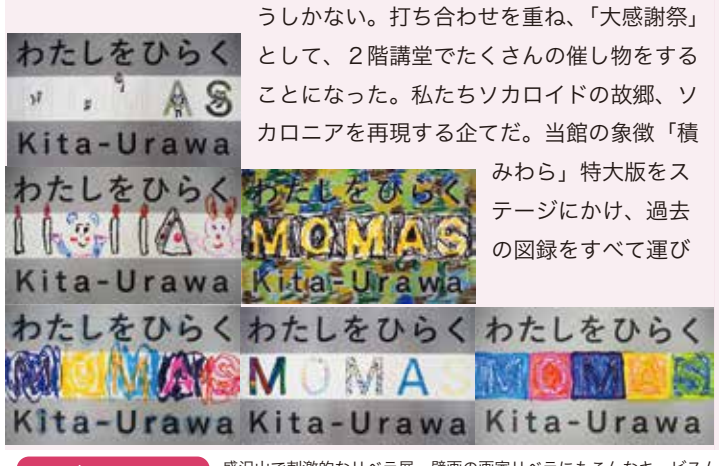
＞＞記録モードから記憶モードへ移行
＞＞＞＞＞ＯＫ

＞＞翻訳機投入
＞＞＞＞＞ＯＫ

埼玉県立近代美術館が35周年を迎えるにあたり、我々のチームに課せられたのは、35周年にふさわしいイベントの立案だった。大規模なワークショップをするのはどうか、記念グッズを作ったらどうか、いやいや掘り出し物を売っぱらってはどうか……　いろいろな意見が出てきたが、皆が共通して考えていたのは「美術館がお膳立てした企画を提供するのではなく、愛してくださるみなさまとともにつくっていく」というコンセプトだった。

打ち合わせを重ね、第1弾として暑い夏から始まった「ベストデザインの椅子グランプリ」と「35周年メッセージ募集」。4回の予選と決勝、12脚の椅子の戦いは熾烈を極め、予選の館内票・twitter票、決選投票の館内票あわせて、5,819人の熱い応援が寄せられた。35年間、当館と一緒に歩んでいただいた方、3世代に渡って当館を愛してくださる方、企画展の思い出を大切にお持ちいただいている方…たくさんの方々の熱いメッセージも、35周年の記憶のリングとして、エントランス丸柱を彩った。

第2弾は開館記念日、11/3である。誕生日ともなれば、盛大に祝うしかない。打ち合わせを重ね、「大感謝祭」として、2階講堂でたくさんの催し物をすることになった。私たちソカロイドの故郷、ソカロニアを再現する企てだ。当館の象徴「積みわら」特大版をステージにかけ、過去の図録をすべて運び込み、会場にもデザイン椅子を並べた。「楽しんでいただけるだろうか？」「つまらない企画だと怒られないだろうか？」モヤモヤした不安を抱え迎えた開館記念日当日。2階講堂のソカロニアは、たくさんの方々の笑顔であふれた。夢中で誕生日ケーキをデコレーションし、自分だけのロゴマークを描く小さなお客様たち。「積みわら」の前でロッキングチェアに腰掛け“フォトジェニック”な写真を撮っているご家族。掘り出し物を揃えたNOMINOICHIで厳しい観察眼を品物に向けている方々…　思い思いに大感謝祭を楽しんでくださる皆様の様子を見て、笑顔があふれるソカロニアを思い出した。至らぬところは数えきれないほどあったが、みなさまとともに35周年を迎えられて本当に良かった。



次の周年企画はいつになるのか。またソカロニアに会えるときは来るのか。チームの担当者の目を盗んでtwitterにも侵入できるようになったし、ZOCALOの編集をしながら次の企画を考えていくことにしよう。そうだ、こんな企カクワドウダロウカ。ガクゲ yrvu イインノ△■ＸsrＸいえ yes ｒ ｙ×○○◎じお srub ｆれｂ ｙ bo,sr@ｎｃ ｙi7a

＞＞ＥＲＲＯＲ，ＥＲＲＯＲ　　ホンヤクキカラダシテクダサイ

ハン　　ブンコシヨウカワシミワ
ガ　　マンシナクテイインダヨ
ノ　　ゾンデイレバナンデモカナウ
ケ　　ケシキワコンナニモウツクシイ
シ　　アワセニナリタイナラアソビニオイデ
キ　　タウラワノワタシノイエエ

※ソカロイド＝ソカロを自動編集する双子のアンドロイド。故郷ソカロニアとともに、学芸員の妄想が産んだソカロ造語群に含まれる。　　翻訳機操作：S.I.

はみだしソカロ 037　盛沢山で刺激的なリベラ展。壁画の画家リベラにもこんなキュビスム時代があったんだ！埼玉県とメキシコ州が姉妹都市！ ZOCALOがメキシコの広場の名前！県外者も納得！（マット・87歳・男性）

はみだしソカロ 038　2歳の息子。ハート型のものを見ると「おしりだー！」と言います。美しい絵も、きれいなモチーフも、ハート型であれば息子にとってはおしり…。（おまめ・37歳・女性）